

油断大敵、ズボンが落ちた（鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2016/7/5 6:30 | 日本経済新聞 電子版

油断！

およそ隙だらけの日常生活を送っている私のことで、油断は当たり前のことなのだが、今回ばかりは、いかに頓着しない私でも、いささか恥ずかしい思いをした。シカゴからトロント、モントリオールと10件ほどのミーティングを終え、ボストン行のフライトに乗ろうとした時のことである。モントリオールは、通関が、即、米国への入国となるわけで、検査も厳しい。ベルトから靴に至るまで、身体検査に備えて、およそ、ひっきりなしに物を持ち、あらかじめ検査用の容器に入れて置くのが常識となっている。いつものように淡々と荷物検査を通過しようとしたのだが、ズボンのポケットに残っていたなにかが反応して、ピーピーと鳴る。それだけなら、検査官が服の上から丹念に不審物のありかを探すだけのことで、よくあることだ。あえて油断！と、まず記したのは、自分が身に着けている衣服がどんな状態なのかを忘れて、無意識のまま検査官のなすがままになっていたからである。

■入念な検査官

検査官は、入念すぎるほど、上半身から下半身と身体のすべてを、両手でなぞるように検査をする。それにしても掌の力が強すぎると思っていたのだが、検査官が、足首に向かってズボンを思い切り引っ張った途端、ベルトを外していたズボンがスポンと下に落ちてしまい、下半身がパンツ姿になってしまったのである。辛うじて、パンツが残っていたので、最悪の事態は避けられたのだが、ほかの検査官や列に並んでいた人々に大笑いを誘ってしまった。スーツのサイズがいささか緩かったので、両手でおさえているべきところを、なんなりと検査してくださいと、両手を上げて、鷹揚に構えていた私に非があるのかも知れない。いささか恥ずかしかったのは、2週間ほどの長い海外出張でも、ラゲッジを預けない方針を貫いているため、下着もなるべく小さく、年甲斐もない超ビキニといったいいパンツを人前で披露するに羽目になってしまったことだ。みっともないこと、この上なかったのである。笑った人のなかには、爺さんにしては、妙な下着をつけていると思った人もいたかもしれない。いずれにしても、いつも無意識、ぼんやりしたまま、やり過ごしているわが生活を、せめて海外にいる時くらいは、少しばかり改めないといけないうだ。

フランスの匂いが残るモントリオール
(筆者撮影)

英国の国民投票で、EUからの離脱派が多数となった後の金融市場は、その直後から翌日にかけては激しい反応があったが、思ったほどの衝撃が続かず、1日、2日経つと、冷静になっている。米国株も、当日こそ、600ドルほど下げたのだが、その後は高値圏で推移をしたままである。円＝ドルの為替にしても、一気に1ドル＝90円台になるといった予測に反して、102円を上下している。日経平均株価も、直後こそ、1300円安と暴落したが、その後は、さほどシリアスな状況にはなっていない。

「英国の離脱の影響がどうなるかを、まだ把握しきれていないからですかね。ポンドにしても、既に高かったのが是正された程度ですね。金融センターについていえば、テロ等々のリスクの高さを考えると、ドイツやパリよりもロンドンの方が安全かと。難民問題を焦点にすることで、離脱派が52%ほどの票を得たのですが、どうなのですかね。離脱を呼びかけていた元のロンドン市長も、キャメロン首相の後継になることについては、辞退している。離脱を訴えていたリーダーの多くが、まさか離脱派が勝利をするとは思わなかった気がしますね。その意味では、米大統領選を前にしたトランプ氏にとって、英国の結果はマイナスになる気がします。そうなるはずがないという前提で、現状を批判する。それが、想定もしなかった現実になると、さすがに恐くなって逃げてしまう。ま、トランプ氏がどうするかはわかりませんが、もちろん、英国の離脱問題と大統領選を同じ視線で論じることとはできないけれど」



鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIT）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催する。近著に「日本インターネット書紀」がある。

ウォールストリートの友人たちの見立てだ。難民問題や無差別自爆テロが広がる状況に、どう対応するか、解がないだけに世界の混迷は続かざるを得ない。通関の検査をどんなに厳しくしても、深刻なテロが収まるとは思えない。ニューアークから長いフライトに乗って、ミラノに着く。マルペンサの飛行場から鉄道でミラノの駅に着いてカフェでパソコンを開きネットで二

ユースを見たら、バングラデシュの人質問題で、日本人7人が殺害されていたという報道を読む。テロは際限なく広がっている。海外で働く日本人も危険にさらされざるを得ない。

■建国記念日の意味

私のパスポートは、あっという間に、出入国のハンを押す空間がなくなるほど、出入国が繰り返されている。年に60回を超す海外出張を続けていた時期もあって、それが数年も続いた。現在もかなりの出入国の回数である。「忘れ物ばかりしているのに、何の事件にも巻き込まれず、忘れ物も奇跡的に出てくるのは不思議なひとですね」。昔から、そんなことを言われ続けている。北半球だと、どこの都市に行っても、誰かしら友人がいる。だからといって、情報量が豊かなのかというと、たいしたことがない。友人と食事をして、無駄話に終始してしまうからに違いない。



ボストンハーバーに面したオフィス（筆者撮影）

ジュライ・フォース（July 4th）。独立記念日は米国の大切な休日である。この日にかけて連休になる。7月1日、金曜日の午後、ニューヨークで最後のミーティングの時には、パークアベニューに面したオフィスビルは休日同様で、ガランとしている。パークアベニューもクルマの数が、極端に少ない。「日本の建国記念日は」と問われる。日本に独立記念日はない。2月11日、昔の紀元節が建国記念日として復活したのはいつのことだろう。建国記念日や独立記念日の成り立ちを探ると、ある面で、それぞれの国の歴史が想像できる。かつての紀元節を建国記念日にあてたのも、日本という国の現在を考えると、いかにもということかも知れない。カナダのケベック州にあるモントリオールは、未だに、フランスの匂いが濃厚である。人々の多くは、フランス語を話している。カフェで飲むコーヒーの味も違う。カナダをめぐる英仏の戦いは、いつのことだったろう。昔の記憶は跡形もなく消えていくようだ。



閑散としたパークアベニュー（筆者撮影）

シカゴに着いた日の夜、リッカルド・ムーティさん指揮、シカゴ交響楽団によるブルックナーの9番のシンフォニーを聴いた。素晴らしい演奏だったけれど、聴きなれたドイツ的なブルックナーではない。「ブルックナーは、なによりオーストリアの人だからね。ドイツとオーストリアは違う文化だから」。演奏会の後、食事を一緒にした時に、ムーティさんはそんな話をする。最終楽章は、オーケストラだけの、ロマンティックで、言葉のない、心に染み入るレクイエムのようなものだった。「それぞれ個別の歴史を持ち、異なる文化と伝統を持つ国々が、一つの連合としてまとまっていくのは、本当に難しいことだね」。英国の国民投票の話をしていたら、ムーティさんは、そんな風につぶやく。ブルックナーの音楽がオーストリアの人の音楽であるということすら忘れて聴いていることがある。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します

鈴木幸一 IIJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

読者からのコメント

eco-okinaさん、70歳代以上男性

Brexitは既に決定したと伝えられていますが、まだ決まっていないと考えます。キャメロンは戦闘を仕掛けたが、初戦が不利と敵前逃亡し、国の将来を決めていない。Brexitが国、UKの将来に関することが明確になったのに、議会での裁決をしていない。キャメロンが首相として義務を果たしていない。世論調査で再投票があれば、残留に鞍替えする人が4%とあり、前回の差が2%で、再投票では逆天する可能性が大きい。全く不可解の状況です。

泉野普久さん、60歳代男性

飛行機の規制は厳しいですが効果を上げてますね。一方飛行場やレストランでは事件が多発している。セキュリティはとにかく問題の根源を探るのは日を追ってさらに根深い。人間の妄想、被害者意識は募り、どこまでも好戦的だ。今回は国民投票という手法も限

界を感じた。扇動した政治家が勝った後にやめてしまうのは、またぞろ世界の政治家への不信を増幅してしまう。方向論よりも、人間の対立について社会全体で勉強したほうがいい知性まで対立軸だ。ケベックも国民投票という歴史があると聞きました。今は幸せかい。離脱っていうのもテーマなる言語ですね。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.